僕は変態でも超能力者でもありません！

北上　光一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は変態でも超能力者でもありません！

【Ｎコード】
Ｎ０３１０Ｒ

【作者名】
北上　光一

【あらすじ】
「へ、変態さんですっ！」女子更衣室で僕は変態になり。「超能力を見せてください！」教室では超能力者になってしまった。でも、よく聞いて欲しいんだ。僕はね、別に頭に下着を乗っけた変態でもなければ、女の子のスカートだけを浮かせるなんて限定された超能力も持っていない。僕はすごく平凡な、どこにでもいるただの男子高校生でしかないんだよ。だから、だからひとつだけ言わせてください。「僕は変態でも超能力者でもありません！」

一話：変態はロッカーから（前書き）

変態な超能力者の物語です。
すいません、嘘です。超能力は使いません。というか、使えません。
変態は……否定できない……。

一話：変態はロッカーから

「なんで僕はこんな所にいるんだろうね……はぁ……」
一人で愚痴りながら、何回目かの嘆息を漏らす。
僕は現在、旧校舎にある女子更衣室のロッカーの中にいる。
七月に入ったばかりなので、ロッカーの中はサウナのように蒸し暑い。
いや、別に女子の下着を取ろうとしてるとかじゃないんだよ。
そりゃあ、ちょっとは……、いや、全然！　そういうのじゃなくてさ。
じゃあなんで僕がこんな所にいるのか。
あれはね、いまから十分ほど前の出来事だったんだ……。

僕は放課後、教室から追いかけてくるストーカーから逃げ、旧校舎にやってきた。まぁ、そこまでは良かったんだけど、忘れていたけどこの旧校舎は入り口がひとつしかない。
さらに旧校舎は一階から三階まであるんだけど、階段が校舎の真ん中にあるひとつしかないんだ。ということは、一度でも上の階に行ってしまうと、その階段を下りている所を確実に見つかってしまう。
だから、もうこの旧校舎のどこかの教室で身を潜めるしかないと思ったんだけど、どの教室にも鍵が掛かっていた。
まあ新校舎が出来てからは、ここには科学部や演劇部といった実験や演技などをしても周りに迷惑にならないという理由の人しか来ないらしいから、使わない教室に鍵を掛けるのは当然だろう。
だったら、科学部や演劇部が使っている部室に入ればよかったんだけど、そんな僕でも簡単に入れる所なんかに身を隠してもすぐに見つかってしまう。

そう考えて、もっと安全に隠れられる場所を探して旧校舎の三階を徘徊していたら、急に階段を駆け上がってくる音が聞こえたんだ。
さっきも言ったように、ここには科学部や演劇部の人しか来ない。だから一瞬、この足音は部の人かとも思ったんだけど、その足音と共に聞こえてきたんだよ。僕の名前を大声で叫ぶストーカーの声が……。
急いで隠れようと辺りを見回したんだけど、この辺の教室には全て鍵が掛かっている。そして、科学部や演劇部の部室に隠れようにも部室があるのは一階だ。いま僕がいるのは三階。そしてストーカがいるのは階段。
もう、この三階に隠れるしか手段が残ってなかった。
必死に手当たり次第に教室のドアに手を掛けて、唯一鍵が掛かっていなかった教室を見つけて飛び込んだら、そこは女子更衣室。
すぐにここから出ようとしたんだけど、ドアの外からストーカーの声が聞こえた瞬間、僕は女子更衣室のロッカーの中に飛び込んだ。

そして、現在進行形で僕は女子更衣室のロッカーの中にいる。
すぐにでも出たかったんだけど、どういうわけかあのストーカーは三階を徘徊しており、ロッカーの中からでもその声が聞こえてくる。
「せんぱーい！　どこにいるんですかー？　出てきてくださいよおー！」
かれこれロッカーに忍び込んで……いやいや、身を隠して十分弱。
額から出た汗が頬（ほお）を伝い、顎（あご）に到達して落ちる。さっきからこの繰り返し。すごく、すごく暑い。
なんで七月に、それも最高気温がどうだとか言っていた今日みたいな日にロッカーに隠れていないといけないんだろうか……。
この暑さから逃れたければ、ロッカーから出ればいい。けど、ロッカーから出ればストーカーに捕まる。まさに逃げ場なしの、ロッ

カーに隠れる一拓の状況だ。
実際すぐに見つかってしまうと思ってたんだけど、さすがに女子更衣室にはいないと思ったのだろうか、さっきから声が更衣室の前を行ったり来たりしている。
狭いし暑いし、早くここから出たいと思った瞬間、
「ん？　なんだ？」
僕の頭に、なにやら布のようなものが落ちてきた。
狭くて手は体の横に真っ直ぐと伸ばした状態だから、この布が何か目視できないのだが、この布が何なのか目視しなくても分かった。
おそらく、いや、認めたくは無いが。この布、その、し、し、した……。
ここは女子更衣室だ。その大前提は揺るがない。しかもよ～く考えてみると、どうして他の教室は鍵が掛かっていたのに、この更衣室は鍵が開いていたんだろうか。
もしや、この更衣室を使用していた人間がいたのではないだろうか？　この布はその人物の……。
だとしたら非常にまずい。ストーカーに捕まってしまうのもまずいが、それ以上に誰かが使っているロッカーに入っているなんて……。
「それって、僕が変態みたいじゃないか！」
ストーカーに捕まって大変なことになるか、このロッカーの使用者に見つかって変態になるか。
当然、後者なんて選びたくもないし、なりたくもない。
僕は急いでロッカーを飛び出した。この際ストーカーに見つかってしまうのもやむを得ない。じゃないと、僕は変態になってしまうんだから。
ロッカーから飛び出した僕を待っていたのは、体操服を着ていた女の子だった。
キレイな黒髪を横に結んだ、いわゆるツインテールと呼ばれる髪型をして、大きな丸い瞳が印象的な大人しそうな女の子が、ロッカ

ーの外に立っていた。
そんな女の子の前に、僕は飛び出したんだよ。そう、頭に布を乗っけた状態でね。
はたして女の子の目には僕はどう映っただろうか。頭に布を乗っけて、汗だくになりながら、息を切らしてロッカーから出てきた僕は、どう、映ったんだろうか……。
その答えは意外にも早く返ってきた。
視線と視線がぶつかって十秒弱。女の子は僕の目の前で、急に糸がプツッと切れたように体を横に傾け、床に自分の体を預けた。
更衣室には気を失って倒れた女の子と、頭に布を乗っけた状態で立っている変態が、そこにいたんだよ……。

一話：変態はロッカーから（後書き）

気軽に読んでください。

二話：僕の特技は『超能力』と『変態』……？（前書き）

早くもヒロイン二人登場です。
名前は……主人公すらまだですね。

二話：僕の特技は『超能力』と『変態』……？

さて、いったいどうしたものだろうか。
いま、僕の前には……というより、床の上には女の子が倒れている。そんな女の子を見下ろす形で立っている僕の頭には、布が乗っている。
その布を手に取り、自分の顔の前に持っていく。
「……やっぱりね」
僕の手には、女物の下着が握られていた。
おそらくここに来たという事は、この下着は只今絶賛床の上に倒れている女の子のものなのだろう。
どうしてわざわざ旧校舎の三階で着替えをしているのか、というか女の子にどうやって説明をしようか。など考えていた時だった。
「せんぱーい！　まさかココにいるんですかー？」
その声と共に勢いよく女子更衣室のドアが開き、この場の空気が一瞬にして凍った。
ドアの外に立っていたのは、件（くだん）のストーカー。彼女の名前は、藤（ふじ）咲（さき）かなで。
ショートカットが良く似合う元気な僕の弟子……らしい。彼女が勝手にそう言っているだけで、僕は別に弟子を取ったつもりなどない。
そんな彼女が、満面の笑みでドアの前に立っていた。
どうして満面の笑みなのだろうか？　普通、この状況を見たら大声で誰かを呼ぶんじゃないのだろうか？
床の上には倒れている女の子。そして、おそらくその子の下着であろうモノを片手に握り締めている。どう見ても危ない奴にしか見えない。
そんな状況を目の当たりにして、どうして彼女は笑顔でドアの前に立っているんだろうか。

そんな僕の疑問と凍った空気は、彼女の発した言葉によって一瞬にして砕かれた。
「なるほど！　今度は女の子のスカートを浮かせるだけではなく、意識を奪う能力にも目覚めたんですね！」
「違うよっ！？　違いすぎるよっ！？　何その能力！？」
実用性がないにも程がある。いや、案外……。いやいや、どう考えても犯罪にしか使用されないような能力じゃないか。それに僕はスカートを浮かせる能力も持っていない。
「ふふふ、さぁせんぱい。かなでに、かなでにその能力を使ってください！　どうぞ！　かなでの意識を一瞬にして奪っちゃってください！」
危ない目をしながら、彼女が段々と僕に近づいてくる。
「いやいや！　そんな能力持ってないし、女の子がそんな事を言っちゃ駄目だよっ！」
そう、これが僕が彼女から逃げていた理由だ。どういうわけか、彼女は僕が超能力者だと思ったらしく、自分を実験台に使ってくれと言ってくるんだ。
あまりにもしつこいから放課後、教室から逃げ出してこの旧校舎に駆け込んだんだけど。どうやら、その判断が失敗だったようだ。
「かなでのスカートを浮かせてくれないなら、かなでは意識を奪われるしか選択肢はありません！」
「何言ってるの！？　もうちょっと選択肢の種類を増やそうよ！　他にも、帰るとか色々あるじゃないか！」
「せんぱいの家にですか？　それはもう決定事項ですっ！」
「違うよ！　自分の家にだよ！　僕の家に帰るっておかしいからね！」
「大丈夫ですっ！」
彼女は親指をビシッと突き上げながら、笑顔で言ってくる。大丈夫って、いったい何が！？
「せんぱいがアパートで一人暮らしをしているのは知ってますか

ら！」
「それのどこに大丈夫って要素があるのっ！？」
駄目だ、僕には彼女の暴走を止めることは出来ない。というか、なんで僕が一人暮らしをしているのを知ってるの！？
僕と彼女が口論を繰り広げている真っ最中。「ん……」という声と共に、床に倒れていた女の子のまぶたがゆっくりと開いた。
「あっ！　気が付いた。ねぇ、君、大丈夫？　どこか打ってない？」
僕は彼女との口論を中止し、倒れている女の子に近づいて声を掛けたんだ。いまだに片手に下着を握り締めた状態でね。
その事実に僕が気づくのが、すごく遅かった……。
「あわわわ……」
コチラに気が付いた女の子の顔があっという間にリンゴのように赤く染まっていくのを見て、ようやく自分がとんでもない爆弾を所持しているのに気が付いたんだ。
「あっ！　えっと……その……」
手をバタバタ振りながら、何かを言おうとする僕を女の子は睨みつけてくる。
すでにストーカーには捕まったので、これから大変なことになるのはもう決まっている。しかし僕は、変態にはなりたくはない！
ここで発言を間違えれば、僕の特技欄に『超能力』だけでなく、『変態』が加わってしまう。慎重に言葉を選ばないと。
女の子にどう言おうか。と、あまり使っていない頭をフル回転させていると、自称弟子がおもむろにその口を開き、この部屋全体にとんでもない爆弾を投下した。
「せんぱい！　この子の意識をまた、奪っちゃいましょう！　さぁ、遠慮なく！」
女の子は顔を赤くするだけではなく、涙というおまけまで付けてきた。なんというサービスだろうか、僕の目にも涙が溜まってくる。
また。と言っているが、僕は一度たりとも女の子の意識を奪って

はいない……。
そんな事を知らない女の子は、ゆっくりと、小さな口を開いた。
「へ、変態さんですっ！」
――今日この日、僕の特技欄に『超能力』と……『変態』が加わってしまった……。

二話：僕の特技は『超能力』と『変態』……？（後書き）

特技欄、昼寝としか書けません……。
あっ、それと読書。
ん？　このふたつって特技なの……かな？
もう少し、自分を磨かないと……。

三話：誤解は誤解を呼び、そして変態も呼ぶ（前書き）

まぁ、実際。どう考えても女の子の目からは主人公は変態にしか見えないと思いますけどね。
それでも、主人公は頑張ります。

三話：誤解は誤解を呼び、そして変態も呼ぶ

「へ、変態さんですっ！」
まぁ、確かに自分の下着を片手に持っている男が更衣室に居たら、誰もがその感想を抱くだろうね……。
「よく聞いて！　それは誤解だよ！　僕は別に変態なんかじゃ――」
「しゃ、喋らないでください！　私はあなたのような変態さんと喋るために生まれてきたんじゃないんです！」
い、いくらなんでも、それは言い過ぎじゃないかな……。
「だから、僕は変態なんかじゃないから！　僕の話を聞いてよ！」
僕が女の子の手を握ると、女の子は激しく抵抗してくる。もちろん、未だ反対の手には下着を握ったままの状態だ。
「やめてください！　返してください！　わたしの下着なんて、売ってもろくな金額になりませんから！」
「ちょ、ちょっと！　君はどんだけ僕の事を変態だと思ってるの！」
そんな事をするほど、僕は大変な変態じゃありません。
「そうですよ！　せんぱいは変態じゃありません！　超！　能！　力！　者です！」
「へ、変態な超能力者さんですか！？」
「二人とも違うよ！　僕は変態でも超能力者でもないからね！？」
「なら、わたしの下着を返してください！　それを持っている限り、永遠に！　生まれ変わったとしても！　わたしの中で、あなたは変態さんですっ！」
「生まれ変わってもって、そこまで僕が変態だって誤解を持って行かないでよ！」
生まれ変わってもじゃなく、せめて死ぬまでにしてくれないかな。
「違います！　超能力者です！」

「いいから、君は黙ってってよ！」
「かなでは君じゃありません！　かなではかなでなので、かなでと呼んでください！」
「かなでって言い過ぎじゃないかな！　君！」
「だから君じゃありません！　かなでです！」
しかたない、このままでは話が進まないのでそう呼ぶことにしよう。
「分かった、分かったよ。じゃあ、かなでちゃん。少し静かにしてくれないかな？」
「ちゃんは余計です！　師匠！」
いよいよ、本格的にかなでは僕に弟子入りをしたようだ。いつの間に僕は師匠と呼ばれるほど偉くなったのだろうか。
「分かったから。ちょっとかなでは静かにしててくれないかな？」
「はい、師匠！」
やっと、これで僕が変態だという誤解を解けるかと思ったのもつかの間、
「やっぱり、とんでもない変態の師匠だったのですね！」
とんでもない誤解が、新たに女の子の中に生まれていた……。
「ち、違うよ！　僕は変態でも、その師匠でも――」
「なら早く！　音速を超えて！　光速も超える速度で返してください！」
「そんな速度で返したら、僕の腕はおろか、君の下着までとんでもないことになっちゃうよ！」
「ただの言葉のあやです！　本気にならないでください！」
そ、そうだよね。ぼ、僕だって本気で言ったわけじゃ……ないんだよ。
とりあえず、自分の誤解を解くために女の子に交渉を試みた。
「いや、返す。返すよ。僕だって欲しくてこれを握ってたわけじゃなんだしさ。これで僕が変態じゃないって分かってくれれば――」
「欲しくない……。そうですよ！　私の下着には魅力なんてない

です！　ですから速やかに、変態さんは下着を返してください！」

――交渉決裂。

女の子は目に涙を溜め、僕との間にあった壁は、ますます強固なものになってしまったようだ。

人間って難しいな。いったい、どう言ったら僕の誤解は解けるんだろう。

「ち、違うよ！　欲しいか欲しくないかと言われれば、欲しい方に僕の気持ちは揺らぐわけであってね、決して欲しくないなんてことは――」

「なっ！　や、やっぱり、やっぱりとんでもない変態さんですっ！」

ど、どうしよう。女の子との間に、強固な壁だけじゃなく、大きな溝まで出来てしまった。

「い、いや、違うよ！　いいからほら、これ、返すから！」

半ば強引に、僕は女の子の手を掴み、手に持っていたものを握らせ、再び誤解を解くための交渉を始める。

「僕は変態でもなんでもないから安心してよ。この更衣室に入ったのだって、この子に――かなでに追いかけられてだったんだし。変な考えは持ってないから」

「だ、だからって、あなたが変態だということには変わりません！」

この子を納得させるのは思った以上に難しいみたいだ。でも、だからと言ってこのままこの子に誤解を与えたままの状態で帰れば、明日にでも学校中に僕が変態だという噂が広まっているだろう。

駄目だ、それだけは阻止しなければ。ごく普通の学校生活を送りたかったんだ。それなのに、変態だなんて誤解が広まれば普通の生活はおろか、進学やら他にも色々と問題が生じてしまう。

「じゃあさ、君はどうしたら僕が変態じゃないと信じてくれるの

かな？」
　コチラから何を言っても無駄なようだから、今度は後手に回ることとした。少なくとも、こちらの方が僕の誤解を解きやすいだろう。そう思ったんだけど。
「へ、変態さんを信じる方法なんてこれっぽちも、残ってはいません！」
　どうやら、僕が何を言っても女の子は信じてはくれないみたいだ。このままでは埒があかないから、かなでにも誤解を解く協力を求めてみよう。
「もう、かなでからも何か言ってよ！　元はと言えば、かなでが僕を追いかけてきたのが原因なんだからさ！」
　と、かなでに訊いてみるが、
「……」
　そういえば、さっきからずっと無言で、喋る気配がまったくない。
「かなで？」
「……」
　どうしたんだろう。さっきまでは静かにしてくれと言っても騒いでいたのに……。ん、待てよ？　静かにしてくれ？
「もしかして……。もう、喋ってもいいよ？」
　僕がそう言った瞬間、
「ぷはぁ～！」
　かなでは勢いよく肺に溜まった空気を吐き出し、口を開いた。
「はい！　了解です、師匠！」
　僕が言ったことを律儀にも守っていたようだ。かなでが口を開いたので、僕は再びかなでに協力を求めた。
「あのさ、かなでからも僕が変態じゃないことを、この子に説明してあげてよ」
「はい！　師匠は変態じゃないです！　超能力者ですから！」
「違うって言ってるじゃないか！　僕は変態でも、超能力者でもないからね！」

「でもっ！　師匠はかなでのスカートを遠距離から浮かせました！　それも、スカートを浮かせるだけでなく、かなでの着ていたシャツまでも！　かなでのブラをバッチリ目撃です！」
「なっ！　あれはちがっ――」
「……」
僕に冷たい視線を送ってくる女の子。
そして、この部屋全体に流れる重く、冷たく、痛い沈黙。
その沈黙を破ったのは、僕でもなく、かなででもなかった。
「や、や、やっぱり！　やっぱり変態さんじゃないですかぁー！」
女の子は大声を上げ、体操服のまま更衣室から飛び出して階段を下りて行った。
「ちょ、ちょっと！　君、待って、待ってよぉー！」
更衣室に残ったのは、かなでと、名前も知らない女の子を呼び続ける変態だけだった……。

三話：誤解は誤解を呼び、そして変態も呼ぶ（後書き）

続きます。続きま……す？　つづ……くの？
さて、主人公はこの後どうするんでしょうか。
正直、私はまだ何も決めてません。

四話：新キャラ登場で状況悪化（前書き）

この四話を書くのは疲れました……。
四話だけで、一ヶ月以上も費やしてしまうとは……。
一ヶ月以上も書くのに時間が掛かってしまったので、多少物語の雰囲気が変化しているかもしれませんが、どうかご了承ください……。

四話：新キャラ登場で状況悪化

部活も何もやっていないので、当然ながら僕には体力というものが備わってはいない。

いや一応、部活？　らしきものには入部している。けど入部しているとはいっても、部室にはまったく顔を出していないので、いわゆる幽霊部員というやつになっている。

だからさっきも言ったように、僕の体には体力なんてまったくと言っていいほど備わってはいない。

そんな僕が今、自分の足を思いっきり動かし、息を切らしながら、新校舎と旧校舎の間にある中庭の歩道を走っている。

隣に建っている新校舎と旧校舎の窓が、前方から後方に流れるように視界から消えていく。

正直言って、走るのをやめたい。

今すぐに立ち止まって、地面に腰を下ろして、休みたい。

けど今の僕には、立ち止まる事はできない。それが出来ればすぐにでも走るのを止め、地面に腰を下ろしている。

でもそれが出来ない。

どうして？

それは……。

「へ、変態さんが追いかけてきます！　今度はストーカーさんに転職ですか！？」

「そもそも、僕の職業は変態じゃないからね！？」

目の前を走っている名前も知らない女の子。体操服を着てツインテールを上下にピョコピョコ揺らしながら、片手には自分の下着を持っている女の子。

この子が、僕が立ち止まれない理由。

今から約五分前。僕は旧校舎三階の女子更衣室で、この女の子の下着を手に持っていた。下着を盗む気なんてまったく無かったし、

更衣室に入ったのだって不可抗力だったんだ。
けど、目の前を走っている女の子はそんな事情を知らない。結果、女の子は僕を女子更衣室に下着を盗みにはいった変態。と勘違いしたまま更衣室から逃走。
更衣室に残っていたかなでにその場で待ってるように言い、更衣室から飛び出していった女の子の誤解を解くために、女の子を追って現在に至るというわけ。

そして現在……はっきりと言うよ。僕は女の子を舐めていた。
いやいや、物理的にじゃないよ！　舌を出してとかじゃないからね！　男と女。っていうのを舐めていたんだよ。
いくら僕の体力が少ないからと言って、所詮相手は女の子。体力的には男の僕の方が上。すぐにでも女の子に追いつける！　そう、思っていた。
しかし、そんな僕の男女差別的な考えは間違っていた。
なぜなら、旧校舎の更衣室からこの中庭まで約五分。必死に女の子を追いかけているんだけど、一向に女の子との距離が縮まらない。
別に僕の足が遅いわけじゃ……ない。そう、僕の足が遅いんじゃないんだよ。ただ、僕より女の子の足が少し速くて、体力があった。そ、それだけなんだからね。
僕は息を吸い込み、目の前に走っている女の子に向かって呼びかける。
「待って、君は僕の事を誤解してるよ！　お願いだから、今すぐ立ち止まって僕の話を聞いてよ！」
「い、嫌です！　私が止まると、変態さんに何をされるか分からないです！　私が止まると、私の命はありません！」
「な、なんて斬新な脅し文句を言ってるの！？　自分の命をもっと大切にしようよ！」
と、そこで女の子が中庭の歩道を抜け、進路を新校舎の中へと変

更する。僕もすぐに女の子の後を追いかけて新校舎へと突入する。
しかし、新校舎に入って廊下の角を曲がった瞬間、事件が起こった。
「う、うわっ！？」
「な、なにっ！？」
廊下の曲がり角から突然出てきた人にぶつかってしまい、僕もその人も思いっきり後ろに倒れてしまった。
「いたたた……だ、大丈夫！？」
すぐに立ち上がり、ぶつかった人に右手を差し伸べると、そこには僕がよく知っている人が倒れていた。
「な、何よ。もぉ……」
「あっ、印長（いんちょう）――」
「印長（いんなが）。印長響（いんながひびき）。って何回言ったら分かってくれるの？」
そう言うのは、僕のクラスメイトの印長響（いんながひびき）。
印長（いんなが）ってなんだか言いづらいから、僕は印長（いんちょう）って呼んでいる。
その印長（いんちょう）が、座ったままの体勢で僕の頭に手を置いてくる。
刹那、頭にとてつもない激痛が走る。
「あと五回？　それとも十回くらい言わないと分からないの？」
「わ、分かったから！　もう充分に分かったから、僕の頭をトマトのように握りつぶそうとしないで！」
この細い腕のどこにそんな握力があるのだろうか。印長こそ、本当の超能力者ではないのだろうか？　今度かなでに言っておこう。もしかして、僕を追いかけるのもやめてくれるかもしれないし。
そんな事を考えていると、印長が僕の頭から手を離し、伸ばしていたままの僕の手を掴んで立ち上がる。
「まったく、あんたは人に迷惑を掛けてばっかりね」
「ハハハ……ゴメン」
「別にいいわよ。それより、今から帰るところ？　私これから買い物に行くんだけど、ちょっと付き合ってくれない？　荷物とか多くなると困るし」

「その……、今ちょっと忙しいんだ」
「何？　私の荷物を持つのが嫌だからって言い訳？」
とても不機嫌そうな目でコチラを睨みつけてくる印長。
「い、いや。そういうのじゃなくて。本当に忙しいんだって。知らない女の子が僕を変態で大変で、それからストーカーに転職しちゃって――」
そんな僕の言葉を、印長は涼しい顔で手を横に振って止める。
「はいはい、そういう言い訳はいいから。私これから職員室に行かないといけないから、そうね……十五分後に校門の前で待ち合わせね。もし遅刻したら駅前にある『リーフ』のケーキをおごりだからね！」
「ちょっと！　だから僕――」
手を振りながら印長は廊下の奥に向かって走っていく。そして廊下の奥の角を曲がり、その姿が僕の視界から完全に消える。
――この瞬間。僕が女の子を見つけて説得するのに、制限時間が発生した……。

四話：新キャラ登場で状況悪化（後書き）

今回の後書きは、言い訳ばっかりです。すいません……。

えっと、この短い文章を書くのに、すごく時間がかかってしまいました……。

時間がかかった理由としては、この作品、見切り発車なんですよ。そのときの気分でスラスラ～と、書いていたものですから、三話後の展開がすぐに頭の中に思い浮かばなかったんです。

結果、主人公が女の子を追いかけたり、追いかけなかったり。新キャラが出たり、出なかったり。と、ものすごい数の展開を書く羽目に……。

ですので、前書きにも書いたように物語の雰囲気が多少変化しているかもしれません。

どうかご了承を……。

もう少し背景などの描写に気を配りたいんですが、実力不足なものですいません。

次回からは、ちゃんとプロットなどを考えて書いていきたいと思います。

五話：ケーキ一個二千円の恐怖（前書き）

今回はコメディー部分がない気がする……。

この五話は、いわば女の子との対話パート2です。

とはいっても、女の子と一言も……（略

五話：ケーキ一個二千円の恐怖

印長響（いんながひびき）。印長（いんちょう）がこの場を去ってしまい、この廊下に立っているのは僕一人だけ。

――大変だ。

非常に大変な事になってしまった。

印長（いんちょう）がさっき言っていた『リーフ』というのは、この学校から歩いて十分ほどの行ったところにあるケーキ屋の略称だ。

デリシャス・スイーツ・ファクトリー。直訳すると『美味しいデザート製作所』。

デリシャスの『リ』。スイーツの『ー』。ファクトリーの『フ』。それらを合わせて、この辺りの学生はその店の事を『リーフ』と呼んでいる。

この『リーフ』、最近出来た店なんだけど、学生の間で――主に女子生徒達にとにかく評判が良い。

特に女子生徒の間で一番人気なのが、『カロリーオフ・ケーキ』というケーキだ。

このケーキのカロリーは、通常のケーキの半分以下。それがこのケーキの売りらしい。

男の僕はカロリーなんて半分だろうが、通常の１．５倍だろうが、美味しければ何でも良い。そう思うけど、女子の考えはどうやら違うようだ。

質の良い小麦粉。質の良いグラニュー糖。質の良い牛乳。それらの食材を使っているからこそ、美味しく、なおかつカロリーを抑える事ができるらしい。

そのせいなのか、『リーフ』のケーキの値段は……。

異常に高い。

いちばん安い苺のショートケーキですら、一個の値段は千五百円。ホールじゃなくて、一個で千五百円って！？

さらにさっき言った『カロリーオフ・ケーキ』は一個二千円もする。女の子の考えを理解できる日は、僕には訪れないと思う。

なにより、僕がマズイと言った一番の理由はこのケーキの値段だ。

僕のいま持っている財布の中には、野口さんが二人しかいない。つまり二千円。

樋口様や、福沢様なんて、両親からの振込みがある日にしか顔を拝む事ができない。

しかも二人は顔を拝んだ次の日に、そろって姿を消してしまう……。

さらに、両親からの振込みがあるまであと十日。

それまで、野口さん二人で過ごさなければならないのに、印長に『リーフ』のいちばん安いケーキをおごってしまうと残り十日を五百円で過ごす事に……。

それだけは回避したい！

そのためには、僕がしないといけないことは二つある。

まず第一に、名前の知らない女の子を見つけて、僕の誤解を解かなければならない。

そして第二に、それを十五分で済ませて、校門に着かなければならない。

――絶望的だ。

さっき更衣室で十五分以上も女の子と話しをしたときさえ誤解が解けなかったのに、今度はそれよりも短い時間で、どこに行ったのか分からない女の子を見つけて済ませろだって！？

正直言って出来っこない！　でも、それでもやらないと、僕の明

日からのご飯が一食になってしまう。それも、一食に使えるお金は五十円……。

――考えるんだ。

女の子はいったいどこに行ったのかを。確実に女の子の隠れている場所に向かわないと、おそらく制限時間を過ぎてしまう。

この新校舎に入ったのは間違いない。入る瞬間まで僕は確かに女の子の背中をこの目に捉えていた。目で捉えていただけだけど……。

新校舎は旧校舎と違って鍵が開いている教室がほとんどない。

去年の冬、この新校舎に不審者が侵入したからしいんだけど、詳しい事は良くわからない。

だから、放課後になると新校舎の教室には全て鍵が掛けられる。

唯一（ゆいいつ）この新校舎で鍵が掛かっていないのは、さっき印長が走って向かった職員室。それに職員室の反対方向にある保健室。

だぶんだけど、女の子はこの二つには向かってはいないと思う。

なぜなら、この二つの教室に向かうには必ずこの廊下を通らなければならないからだ。

けど僕が印長とぶつかった時、この廊下で女の子の姿を見ていない。

そうなると、女の子が向かったのはこの一階より上の階層。

二階か、あるいは三階。だけど、どの階層の教室にも鍵が掛かっていて隠れられる場所はないはずだ。

なら、どこに？　他に鍵の掛かってない教室なんて……ん？　教室？　教室じゃなかったら……。

「……あっ！」

そうだ。もうひとつ、もうひとつだけ鍵の掛からない場所があった。

僕は隣にある二階へと続く階段を一気に駆け上がる。

階段を駆け上がって二階の廊下に出るけど、目的の場所は二階じゃない。三階でもない。さらに上、僕は三階を抜けてさらに上を目

指す。
そして上へと続く階段がなくなり、これ以上は上にはいけない。
でも、それで良い。もう上には向かわなくても良いんだから。
僕の目の前には、階段の変わりに大きな扉が姿を現す。
「鍵は――――」
良かった、掛かってない。なら、もうここしか残ってない。
その大きな扉の取っ手を掴み、僕は一気にその取っ手を自分の方に引く。
取っ手を引くと、大きな扉の隙間からから光が差し込んでくる。
薄暗かった空間が一気に大量の光に包まれる。上から降り注いでくる夏の暑い日ざしに目を細めながら、僕はゆっくりと鉄の扉をくぐる。
扉をくぐり細めていた目を開く。すると、この周囲を囲むように張り巡らされた転落防止の金網、それと床一面に広がるコンクリートが僕の視界に入ってくる。
ここは新校舎の屋上。
そう、職員室と保健室以外で唯一鍵が掛からない場所……。それが屋上だ。
ここ以外、女の子が行ける場所はもうない。
辺りを見渡してみる。この屋上にあるのはせいぜい、昼食を食べるときに座れるようにと用意されたベンチが四つ設置されているくらい。
そのうちの一つ。僕がいま立っているこの扉の前、そこから一番離れた場所にあるベンチから、黒い髪の毛が二つ、自身の存在をアピールしていた。
まさに、お尻隠して頭隠さず。の状態だ。
「……見つけた」
ポケットから携帯を取り出して今の時間を確認する。
携帯に表示されている時間は、午後四時五十分。
おそらく残っている時間は十分(じゅっぷん)を切っているだろう。

その時間内に僕は女の子の誤解を解いて、校門前に向かわなければならない。
はっきり言って、出来る気がしない。
――けど、僕はやらなければならない。
僕が変態でない事を女の子に理解させるために。
僕の明日からの一日一食を防ぐために。

僕は黒い髪の毛が二つ飛び出したベンチ向かって足を踏み出した。

五話：ケーキ一個二千円の恐怖（後書き）

かなでは別にいなくても……。

五・五話：一方そのころ印長さんは……（前書き）

六話ではなく、五．五話です。

主人公と別れた後の印長さんは頑張ってました。

五・五話：一方そのころ印長さんは……

「やっぱい、早く校門の前に行かないとアイツが先に来ちゃうじゃない」
「やあ、印長（いんなが）さん。そんなに急いでどうしたんだい？」
「あっ、理本（りもと）先輩。どうしたんですか？　確か今日は三年生は全員休みのはずじゃ……」
「僕は料理研究部の部長だからね。学校が休みだろうと、日々料理の研究をするために学校に足を運んでいるんだよ」
「はぁ……。そうですか」
「それより印長さん。この間の入部の件、考えてくれたかい？」
「ですから、私はどこの部活にも入る気はありませんって言ったじゃないですか」
「ははは。まったく、そんなに恥ずかしがらなくても大丈夫。料理研究部一同、印長さんが入部してくれるのを心から待っているのだからね」
「ですから――」
「おっと、それより印長さん。これからこの特注巨大バケツに作ったプリンを試食するのだけど、良かったら一緒に試食してみないかい？　このプリンを作るために、わざわざ直径五メートルのバケツを用意したんだけどね。これくらいの大きさになると通常の硬さでは形を維持する事ができなくてね。どうしてもこの形を維持しようとすると通常よりもプリンが硬くなってしまって舌触りも――」
「えっと、すいません。これからちょっと用事があるんです」
「そうか、用事があるのなら仕方がないな。」
「すいません、また誘ってください。じゃあ失礼します」
「ふむ、走って行ってしまったか。仕方がない。ならこの巨大プリンはしばらくこの木の下で冷ましておくとしよう」

五・五話：一方そのころ印長さんは……（後書き）

この五・五話は短い会話だけです。

次回は六話の予定です。五・六話にはならないはずです。たぶん……。

一方そのころ主人公は……？

六話：今日の空は雲ひとつない綺麗な青空（前書き）

お、お久しぶりです……。

六話：今日の空は雲ひとつない綺麗な青空

一歩、また一歩と進み、ゆっくりと目的のベンチの前で足を止める。
これが最後のチャンスだ。ここで女の子の誤解が解けないと、おそらく明日から僕のあだ名は『変態』、あるいはそれに近いものになる。
仮にそんな不名誉なあだ名が付かなくても、朝から職員室に呼ばれることは確定だ。
だから、今度こそ失敗は許されない。
ゆっくりと息を吸い込み、肺にたまった空気を一気に吐き出す。
気持ちを落ち着かせ、僕は重く閉じていた口を開けた。
「あの、ちょっと良いかな？」
僕が訊くと、ベンチから飛び出している二つの黒い髪がビクッと跳ね上がった。
しかし、待っていてもに向こうから返事が返ってこない。
くっ、どうあってもベンチになりきるつもりか。
しかし、コチラには時間がない。印長（いんちょう）との約束がなかったらゆっくりと誤解を解けるのに。
「あ、あのさ、聞こえてる？　聞こえてたら返事をしてくれないかな？」
すると、今度は返事ではないけど反応があった。
ピョコピョコと髪が動いていたベンチの影から、何かがこっちに飛んでくる。
それを目の前で掴み取り、確認する……。
――下着だった。
「な、なんで！？」
な、なんで下着が僕の顔に向かって飛んでくるの！？

僕が下着を掴んだと同時に、ベンチの後ろで隠れていた女の子が立ち上がった。
「そ、そんなに欲しいならあげますっ！　だ、だからもう、私を追い掛け回さないでください！　変カーさんっ！」
「へ、変カー！？　へ、変態とストーカーを混ぜないでよ！　その二つは混ぜるな危険って表示がされてるんだからね！」
世間でその二つを持っていたら確実に捕まってしまうから！
「な、なら早くそれを持ってどこへでも消えてください！　そして二度と地球に帰ってこないでくださいっ！」
「僕に下着一枚で宇宙に飛び出せとっ！？」
問題がありすぎて、問題以外が見つからないよ！？
「な、なら私の目の前から消えてください！　私が生きている間は日本から出て行ってください！」
「だから僕に下着一枚で世界に飛び出せとっ！？　たしかに宇宙よりは難易度が一気に下がったけど、絶対に空港の検査で引っかかるからね！」
し、しまった。つい流れで返したけど、今はそんな時間はないんだった！
「別に僕は君の下着が欲しくて追ってきたんじゃないんだ。これは返すから。だから僕の話を聞いてよ！」
「あ、あなたの話なんて聞いても無駄です！　どうせ先ほど更衣室で聞いたようなことしか言わないに決まってます！　犯人は絶対に自分は犯人じゃないって言うんです！」
そう言いながら、女の子はジワジワと僕から距離をとっていく。ゆっくりと後ろに下がりながらも、その視線には敵意が込められているのがわかる。
くっ、どうすれば女の子は解ってくれるんだ。もう時間が無いというのに。
何かいいアイデアはいかと考えていると、不意に女の子の後ろにあった立て札の文字が目に入った。

『只今、金網修理中になので触れないでください。もし寄りかかったりなんてすると、屋上から真っ逆さまに落ちちゃうぞ♪』

「なっ！？　ちょっと！　危ない、危ないからそれ以上向こうに言っちゃ駄目だよ！」

「あ、危ないのはあなたです！　目が血走っています！　鼻息が荒いです！　そのこっちに伸ばされている手に危機感を抱きます！」

僕が手を伸ばしたのが逆効果だったようで、女の子は自分の身体を抱き、さらに後ろに下がる。

「後ろ、後ろにある立て札を読んで！」

「だ、騙されません。後ろを向いた瞬間、飛び掛ってくるに決まってます！」

だ、駄目だ……全然僕の話を聞いてくれない。

なんでこんなに危ない状態なのに教師は屋上を開放してるんだ！

どうしよう、このままだと女の子が金網に寄りかかってしまう。

印長との約束の時間も近いし、何より女の子が危ない。

「分かった、分かったよ。僕はもう変態でも何でいいから、だからその場で止まって」

仕方がない。女の子の命と僕の汚名、どちらが大切か……天秤に掛けるまでもない。

僕は両手を挙げ、ゆっくりと後ろに下がる。

「な、何を考えてるんですか……」

僕が後ろに下がると、ようやく女の子が止まってくれる。とりあえず、これ以上女の子が金網に下がるのを止められたわけだ。

「何をって、君のことを考えてるんだよ」

それ以上下がると金網に触れちゃうからね。

「な、何を言うんですか！　変態さんの頭の中に私が存在するだけで寒気がします！」

寒気がすると言っているのに、女の子の顔はなぜか真っ赤になっ

ている。というか、サラッと僕の心を綺麗(きれい)に抉(えぐ)ってくれる……。
「僕はもう屋上から出て行くよ。出来れば、君の誤解を解いてから出たかったんだけど……」
屋上の地面に女の子から渡された（？）下着を置いて、再び両手を挙げながらゆっくりと後ろ向きで扉に向かう。
せめて、せめて印長との約束は守ろう。今から走ればギリギリ間に合うはずだ。明日から学校に来るの恐いけど……。
「あ、怪しいです……怪しすぎます。も、もしかして、これは罠ですか！？　私が油断した所を襲う気なんですね！　私は絶対に騙されませんからねっ！」
勝手な勘違いをして、女の子がまた一歩だけ後ろに下がった……次の瞬間、屋上に突風が吹いた。
「きゃあ！」
その突風に当てられ、女の子の身体が後ろに倒れる。
その先にあるのは金網。いつもなら、こういう事態のときのために用意されているものだが、今回ばかりはそれが災いした。
後ろに金網があるせいなのか、女の子は横に倒れようとしない。重力に身体を任せ、むしろ金網に背中を預けようとしている。
「危ないっ！」
このままだと落ちる！
考えるよりも早く、反射的に女の子の元へと走っていた。
本人はまだ気づいていない。このままだと絶対に落ちる。もう変態だとかそういう話をしている場合じゃないっ！
「へっ？　何を、きゃあ！」
「くっ！」
ギリギリだった……。女の子の身体が金網に触れるか触れないかの瞬間、なんとかその手を掴むことに成功した。
女の子を手を引っ張り、金網からの距離をとる。
危なかったぁ。後一秒でも遅れていたら手遅れになるところだった。

「よかったね。これでもうだいじょ――」
「い、い、い、いやぁぁぁぁぁぁ！」
僕が言葉を発する前に、女の子は自分の身体を軸にして、思いっきり腕を捻（ひね）り、その遠心力に逆らえず僕の身体が右に引っ張られる。
そして、ガシャン！　という怪しい音が耳に届くのと同時、何か硬いものに背中が触れた。
視界がゆっくりと屋上の地面から空へと移っていく。
あぁ、雲ひとつない綺麗な青空だ……。
――気づいたとき、僕の身体は校舎の屋上から真っ逆さまに放り出されていた。

六話：今日の空は雲ひとつない綺麗な青空（後書き）

リハビリです。

五ヶ月……？　もの間、全く書いていなかったので文章がおかしくなっているかもしれません。

どうかご承知を……。

七話：お酒は二十歳未満は飲んではいけません（前書き）

あっさりと場面移動～……

それと一度見ていただいた方へ。

大幅に修正しましたので、よろしかったらもう一度、目を通していただければ嬉しいです。

七話：お酒は二十歳未満は飲んではいけません

目を覚ますと、僕はベッドの上で横になっていた。
辺りからは、アルコールの匂いが漂ってくる。
上半身を起こし、周りを見渡す。
僕が横になっていたのはシミひとつない真っ白なベッド。顔を上に向けると頭上にはベッドと同じ真っ白な天井。視線を下に落とすと自分の顔が映るほど磨かれた床。
そして、窓際置かれた机の上に並ぶ大量の酒瓶。
「あぁ、間違いなくアル中部屋だ」
「誰がアル中だ、誰が」
ゴツッ！！
背後から声が聞こえると同時、後頭部に痛みが襲う。
痛む頭を抑えながら振り向くと、そこに白衣を着た女性が不機嫌そうに立っていた。
ぼさぼさにした髪を後ろでひとつにまとめ……要するにポニーテールにし、ヨレヨレになった白衣からはこの女性の性格が適当なのが窺(うかが)える。
そんなこの人は、
「アル中先生、いたんだったら堂々と正面から出てきて下さいよ」
「だから、誰がアル中だ。誰が」
このヨレヨレの白衣を着た女性の名前は水梨(みずなし)先生。一部の生徒からはアル中先生と親しく呼ばれている教師だ。
この水梨先生、校長や教頭に生徒のために消毒用アルコール（お酒）を実費でいいから用意させてくれと直訴し、なんと勝訴したという伝説を持っている。
どうやって勝訴したんだろうか。なにより未成年が集まる学校にお酒を持ってくるなんて、校長や教頭が黙っていても教育委員とかにばれたら大変じゃないの？

「その辺りにも一応、交渉しておいたから大丈夫だ」
「あっ、そうなんですか……って、なに人の心を勝手に読んでいるんですか！」
「私は読心術の資格を持ってるんだぞ。知らなかったのか？」
「そんなの知りませんよ！」
「という冗談は置いとくとしてだ。そういうことはブツブツと独り言を漏らすのを止めてから言うんだな」
「えっ！？」
も、漏れていたのか……。なんかすごく恥ずかしい。
「それよりもだ。お前、校舎の屋上から真っ逆さまに落ちたらしいな。一応、教師だから訊いておくが、怪我とかしていないよな？」
「一応って何ですか！　って、え？　屋上から落ちた？　誰がですか？」
「誰って……お前だよ、お・ま・え」
先生がだるそうに腕を上げ、僕に向かって人差し指を伸ばす。
首を少し右に曲げてみた。
それを追うように先生の指も右にずれ、先生の指が僕の眼前に来る。
今度は左にずらしてみると……。
「お前だよっ！　お・ま・え！」
「うわっ！　いきなり大声を出さないでくださいよ」
「まったく、あ～……今ので体力の半分は持ってかれた……」
「どんだけ体力がないんですか！」
そう言いながら、先生は近くにあったイスに座り、酒瓶が大量に置かれた机に倒れこむ。
まったく、そんなに疲れるんなら最初から大声を出さなかったらいいのに。
あれ？　お前って僕？
「って、屋上から落ちた生徒って僕のことですか！？」
「あ～、うるさいうるさい。さっきからそう言ってるだろうが。も

ういい、お前がどこか怪我をしていたとしても、私はもう知らない。いまここで、私は職務放棄の権利を行使する」
「先生はそんな権利を持っていません！　ていうか、教師はその権利は使ってはいけませんからね！」
はっ！？　思わずツッコミを入れてしまったけど……えっ、僕が落ちた？
待て待て、よく思い出すんだ。屋上で何があったんだっけ。
そうだ、女の子を追って屋上に向かって、ベンチの陰に隠れているのを見つけて……。

――下着。

違うよ！　それはもう少し後だよ！
それでベンチの陰に隠れているつもりになっていた女の子に話しかけて。

――下着。

ちが――いや、そうだ……ベンチの影から下着が飛んできたんだった……。
そして女の子が立ち上がって、誤解を解こうと頑張って、後ろにあった金網修理中の立て札が見えて。

――下着。

なんでさっきから僕の脳内には下着しか浮かんでこないのっ！？
いや、まぁ、それで下着を地面に置いて後ろに下がったんだけどさ……。
それから屋上で急に突風が起きて、女の子が倒れ掛かって、気づいたら女の子の手を取っていて、女の子が大声を上げて僕を振り回

して……。
　そして、雲ひとつない綺麗な青空が見えたんだ。
「うわぁぁぁ。落ちた、落ちちゃった！　先生、大変です。僕、屋上から落ちました！」
「今更なにを言ってんだ。さっき私が言っただろ」
　落ちたんだ。僕、校舎の屋上から落ちたんだよ！　えっ、でも僕、いま生きてるよね？
「そうですよ先生！　なんで校舎の屋上から落ちたのに生きてるんですか！？」
「なんだ、死にたかったのか？　なら校舎の上からまた飛び込んでこい」
「あなたは本当に教師ですか！？」
「遺書は忘れるなよ。でないと最後に会った私が犯人にされかねないからな」
「あなたは絶対に教師ではないっ！」
　はぁ。と先生は大きくため息を吐き、さっきまでの面倒くさそうな表情はどこにいったのか、すごく真剣な顔になる。
「まあ、本当の事を言うと、お前は確かに校舎の屋上から落ちた。だが、しかし、私が、この私が直々に下に張っていた落下防止のネットのおかげで助かったんだ」
　どうだ。と言わんばかりに、先生はイスに座ったまま身体を反らす。
「そ、そうだったんですか」
　な、なるほど、校舎の下に落下防止のネットが張ってあったおかげで助かったのか。
「感謝しろよ。私が落下防止のネットを張っていたおかげで助かったんだからな。要するに私はお前の命の恩人というわけだ」
　あれ？　でもそれって……。
「なら、その命の恩人に質問してもいいですか？」
「ん？　なんだ？」

「どうして校舎の屋上の鍵を掛けなかったんですか？」
「屋上に行くのが面倒くさかったからだ」
「あなたのせいで落ちたんじゃないですか！」
「ちっ、ばれたか」
ちって言ったよ！？　この人、生徒が屋上から落ちたのが自分のせいなのに、謝りもしないよ！？
「ばれたかじゃないでしょ！　落ちたんですよ、それなのになに自分のおかげで助かったみたいに言ってんですか！」
「だが実際、私がネットを張ってなかったらあれだぞ、お前なんか醜（みにく）く汚い潰れたトマトになってたんだぞ」
醜いって……なんで僕の周りにいる女性って、こうもサラッと心を抉ってくる言葉が出てくるんだ。
あの女の子にしても……。
「そうだ、女の子。先生、女の子は来てませんか？」
「女の子なら目の前にいるだろうが。可愛くてセクシーなのが」
「先生はもう女の子と言える年では痛い！　痛いです！」
「ん、なんだ？　よく聞こえなかったから、もう一回言ってくれないか？」
「痛いです！　頭を握っているこの手を離してください！　可愛くてセクシーでお若い水梨先生っ！」
そう叫ぶと同時に、ぼくの頭を掴んでいた指から力が抜ける。
「恥ずかしいじゃないか。あれだぞ、生徒と教師の壁を越えての恋愛はダメだからな」
本当に、どうして僕の周りにいる女性はこんなにも個性的なのが多いのだろうか。
あの女の子にしても、かなでにしても、印長にしても……。
「ん？　あっ！　あぁぁぁぁ！」
「どうした。今になってどこか痛み出したのか？　なら早く保健室から出て行って病院に駆け込め。ここで何かあったら私の責任になってしまう」

本当にこの人はなんで教師になれたんだろう。
「そ、それより！　いま、いまは何時ですか！？」
ポケットに手を入れて携帯を探したけど、見つからない。もしかして落下したときに落としたのかも。
「そこに時計があるだろ。あれか、定期的に危ない薬を打たないといけないのか？」
「だからあなたは本当に教師なんですか！？」
水梨先生が指した方向に目をやると、そこには白黒のシンプルな掛かっていた。現在、時計が指している時間は……六時十五分。
確か、印長と最後にあったのが五時三十分。
そして、その時に約束した時間が十五分。
さぁ、小学生でも分かる問題だ。五時三十分に印長さんと十五分後に校門で待つという約束をしました。しかし、現在の時間は六時十五分。さて、いったい何分の遅刻でしょうか。
答えは――三十分の遅刻。
「まずいっ！　マズイっ！　不味いっ！　野口さんが！　野口さんがワンコインにっ！」
「野口……？　誰だそれ？」
もうこんな所にいる時間はない。先生に女の子の事を訊きたかったけど、ここにいないって事は間違いなく帰ってるのだろう。
僕としては残っていてくれた方がありがたかったけど、いないのなら仕方がない。女の子の家なんて知らないし、仮に分かった所でその家に訪問したら女の子よりも先に青い服を着た国家公務員様が現れるのが目に浮かぶ。
幸い、水梨先生は女の子を知らないようだし、おそらく女の子は更衣室であった出来事を教師には話していないんだろう。なら明日、誰よりも早く登校して女の子が来るのを待てば、僕にもチャンスはまだある！
「先生、特に何かしてくれたわけでもないですけど、ありがとうございました」

「先生からありがとうございましたの間に余計なものが入ってるぞ」
「僕、もう行くんで。行かないといけないんで！」
「いやいや、止めはしないよ。むしろさっさと出て行ってくれ」
先生は最後まで教師らしい発言をしなかった。
いや、それよりもまずは目先の問題だ。
僕はベッドから急いで飛び降りて、保健室の扉に向かう。
「じゃあ、何もしてくれなかった先生。失礼しました」
「本当に失礼な奴だな」
そう言い残し、僕は保健室を後にした。
目指すは校門。おそらく怒りゲージが限界まで溜まっている印長の所。
女の子の問題は明日に回して、とりあえず、印長への言い訳を考えよう。
どうやったらケーキをおごらなくて済むか。
今の僕の頭の中には、それしかなかった。
だから、校門前に着いたとき、僕の頭の中は予想外の出来事で真っ白に染まった。
「な、なんで。なんであの女の子と印長が仲良く話しているんだろう……」

七話：お酒は二十歳未満は飲んではいけません（後書き）

九月二十三日に大幅に修正いたしました。

スイマセン。こういうことは、今後ないように気をつけます。

七・五話：待ち人来るまでしばし談笑（前書き）

今回はすごく短いです。

七・五話：待ち人来るまでしばし談笑

――午後六時校門前――

「あいつ、何やってんのよ。まさか約束を忘れてるんじゃないでしょうね……」

確かあいつと約束していたのが確か四十五分だから、もう十五分の遅刻じゃない。

遅刻しないように急いで用事を済ませて来たのに、なんでまだあいつは来ないわけ？

そりゃあ、五分くらいの遅刻ならまだ許せるけど、十五分よ十五分。もうこれであいつにケーキをおごらせる事は確定してるけど。

「あの……すいません」

これだけ待たされてケーキだけってのも何だか面白くないわね。そうだ、今度の休みにあいつを荷物持ちとして連れまわしてやろうかしら。

「す、すいません。少し私のお話を……」

そうね、それがいいわ。色々と買いたい物もあったし、あいつだって男なんだからそれくらいの罰は受けるのが当然なのよ。

「決めたっ！　今度の休みにあいつを連れまわしてやるんだから！荷物持ちよ、荷物持ち。それくらいの罰を与えないと、あいつはきっと反省しないわ！」

「あ、あの！　私の話を聞いてくれませんか！」

「え？」

「よ、よかった……やっと気づいてもらえました」

「えっと、私に何か？　ごめんなさい、少し考えごとをしていたから」

「あっ、いえ。その、少し聞きたいことがあって……」

「聞きたいこと？」

「は、はい。その……ここをへんた――二年生の男子の方が通りませんでしたか？」
「二年の男子？　そうねぇ、私は四十五分からここにいるけど、その間に通った二年の男子は一人もいなかったわよ？」
「そ、そうですか……。じゃあ、まだ帰ってないんだ……。ありがとうございました」
「ねぇ、その二年の男子に何か用なの？　私も二年だし、用があるなら伝えとくわよ？」
「あっ、いえ。その、これは私が直接言わないといけない事なので……。それに、渡さないといけない物もありますし……」
「へ、へぇ」
「わ、私もう少しここで待ってみます……。あそこは先生がいたし……」
「え？　あぁ、そう。私もね、二年の男子を待ってるのよ。よかったらその男子が来るまで私の話し相手になってくれない？」
「は、はい。私なんかでよかったら……」
「全然、むしろ大歓迎。私は印長、印長響（いんながひびき）よ」
「あ、私は――」

――午後六時十五分校門前――

七・五話：待ち人来るまでしばし談笑（後書き）

まぁ、主人公が寝ている間の出来事です。
女の子の名前が出るのはまだ先です……はい。
あっ、あと主人公もです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0310r/

僕は変態でも超能力者でもありません！

2011年11月17日19時19分発行